



南極

第7号

平成13年4月20日

南極倶楽部会報

南極観測の始めごろ

鳥居 鉄也

昨年の秋、NHKのプロジェサからプロジェクトXという番組で日本の南極観測を取り上げる話があった。南極観測に参加した経緯と第1次越冬隊の活動を中心にしたいというので、文部省で担当された当時の岡野澄学術課長、それに永田先生の下におられた福島直さん(東大名誉教授)さらに朝比奈菊雄、村山雅美、鈴木康、平山善吉の1次隊諸氏など、当時の通称足軽組の面々をご紹介した。

この番組はこの2月に放映され、第1回が9.8、第2回が10.5パーセントという視聴率と聞いたが、なかなか好評であったようだ。しかし私に言わせれば、1957年2月28日の深夜、宗谷がオビ号に救出された一幕はぜひ入れて貰いたかった。始めは入れることになっていたが……。密群氷を物ともせず、宗谷の左舷に現れたオビ号が先導して氷海を脱出したわけだが、松本船長が前進後進を繰り返し、最後まで自力脱出に精魂を尽くす姿勢には、後甲板で見ていた私達にも涙を誘うほどの悔しさがこみ上げるものであった。

そして一方、オビ号の行動は、まさに国際地球観測年(IGY)の南極観測が国際協力事業で行われているということを示してくれた。

さてこの番組は、私達オールドボーイに久しぶりに40年前の出来事を思い出させたようで、テレビが終わると、私も思いがけなく多くの方から、それも長くお付き合いしていなかった友人などからも電話をいただき、びっくりした。1945年8月、敗戦を迎えてまだ10年、国力も回復していなかった日本が、アジアからただ一国だけが科学の面で国際協力事業に参加することになったわけで、今では想像もできないほど明るい話題を国内に巻き起こした。南極への途中シンガポールに寄港した時でも、当時僅か100人足らずの在留邦人が日の丸の旗を振って歓迎してくれた。戦後、公船が入港したのは初めてだと感激していたのは忘れ得ない。予算が充分になかった時代に、観測隊の派遣が円滑に進められたのは、この事業の火付け役である朝日新聞社の後援を始めとし、国民の絶大な物心とももの支援のおかげと痛感している。

日本学術会議の地球物理学研連が、

第3回IGYの一環として行われる南極観測に、参加の意向を固めたのは1955年の8月ころで、出発が翌年の11月と予定されていたので、準備には全く余裕のないスケジュールとなった。日本山岳会の歴代の会長、榎有恒さん、松方三郎さん、別宮貞俊さんらが、茅誠司先生（当時の日本学術会議会長、南極観測生みの親）に西堀さんを副隊長として推薦されたのも年末近くになってからで、観測隊の準備は時間との戦いであった。

東奔西走の西堀さんはアメリカに飛んで、初代サイエンス・アタッシェとして当時駐米大使館におられた向坊隆先生（後の東大総長）にお願いして、上陸予定地のプリンス・ハラルド海岸周辺の航空写真入手の手配をされたり、またアメリカ隊の方から氷海航行にはアイスパイロットが大切だとアドバイスされ、南極半島に向かったF.ロンネ隊（1947 - 48年）の船長を務めたI.シュロスバッハ氏の紹介を受けたりした。しかし、この話は海上保安庁の同意がえられなかったとも聞いている。なお設営全般については、オーストラリアの南極局長P.ロウ博士から多くの情報を入手した。私達の日本隊の初期の装備はほとんどこれらを活用している。テントを始め装備の見本は皆オーストラリア隊のものであった。

思い出せばきりがないが、最後に一つ付け加えるとすると、日本の南極観

測関係機関は資料の保管が不十分ではなかろうか。初期の設営部門の資料や、特に撮影したフィルムなどは時を経ると共に大切になる。今回のプロジェクトX放映のさい、依頼されてフィルムを探すのに大変苦労した。外国隊、とくに隊員の撮影したフィルムなどの保管には定評のあるオーストラリア隊を見習いたい。（1次夏・設営、2次・地球化学、4次冬・副隊長、8次冬・隊長）

密かな誇り

荒金 兼三

私の80年近い人生の中で、密かに誇りに思っている事が二つあります。その一つが南極観測隊に参加できた事です。機械学会の南極委員会では、南極で使用する雪上車のエンジンをガソリンエンジンにするか、ディーゼルエンジンにするかという話がありました。当時（昭和30年頃）は寒い所の車輛のほとんどが始動性の良いガソリンエンジンを使用しているのが一般的であったのに対して、ディーゼルエンジンにすれば発電機のエンジンとの互換性、また燃料の統一が計れる等の意見があった様ですが、最終的にガソリン車3台（内レッカー車1台）とディーゼル車1台となりました。これらの車輛は組立完成後、川崎の工場から文部省までデモ行進をして当時の松村文部大臣が試乗した事がありました。

昭和32年1月29日、オングル島に昭和基地を建設する事になり、雪上車は24時間のフル回転となりましたが、輸送ルート上にはパドルあり、クラックありで悪戦苦闘でした。宗谷の乗組員の方々の強力な応援を得て、当初10時間余りかかった輸送時間も後半には2時間余りで輸送できるようになりました。いつの間にか宗谷舷側にテントが張られ、ここで輸送荷物の伝票を受け取るのですが、テントの横には丸南運送の看板が掛かっていました。そして輸送路は昭和街道となり、パドル地帯には「温具留署」の速度制限の立札が立ち、街道の中間点付近には空箱の上にピースの缶が置いてあり不二家のペコちゃんが店番をしていました。このタバコはいつもなくなることはありませんでした。ドライバー達はここで一服して、最後の難関である「男の花道」を通過して基地に着くのですが、何時に到着しても必ず、西堀越冬隊長か藤井隊員が出迎えてくれました。

この間雪上車はパドルに落ちエンジンに水が入った事故が何台かありました。これらはその場でオイルとフィルターを交換しただけで走らせるような事をしましたが、一番恐れていた致命的な故障もなく、11人の越冬可能な物資が運べた事はまことに幸せな事でした。

もし雪上車の故障で荷物が運べず越冬出来なかったとしたら、私はとても

生きて帰って来られなかったと思います。今でも無事に走ってくれた雪上車に感謝している次第です。

もう一つの密かな誇りは、古い話で恐縮ですが、昭和17年2月北支派遣戦車第17連隊に入隊した事です。そして支那各地を転々と移動していましたが、昭和20年6月私達の第一中隊は駐蒙軍（仮にモンゴル駐屯軍とします）に配属になり、張家口（内モンゴルの第2の都市）に集結しました。

昭和20年8月9日ソ連（ロシア）参戦、8月15日終戦。終戦後の満州（中国）での邦人に対する惨状は今日なお消えることがありません。

これに比べ内モンゴルでは、モンゴル駐屯軍の一箇旅団がソ連軍の機甲部隊を阻止し、その間に張家口から在留邦人約4万人が無事引揚げたのです。

8月14日ソ連軍の機甲部隊が迫りつつあるとの情報はありましたが、詳細が判らず、私の属する軽戦車3両が戦車斥候として出発しました。張家口北西約40キロ地点でソ連軍の機甲部隊と遭遇しました。それらの車輜と接触を保ち乍ら張家口近くの丸一陣地まで撤退しました。

モンゴル各地から張家口に集結している在留邦人を一人も残さず引揚げさせるには少なくとも3日間は必要という判断から、丸一陣地の独立混成第二旅団がこの間を死守する事になりました。私の操縦する軽戦車もソ連軍の侵

入を防ぐ障害物として、道路の中央に置いて最悪の場合は自爆する事にしました。

しかし邦人の引揚げが順調に進み、「8月20日、内モンゴル邦人4万人奇跡の脱出」が叶ったのです。この作戦に、参加出来たことを密かな喜びとしております。(1次夏・機械、3次冬・機械、5次冬・機械、7次冬・機械)

クック岬の海氷旅行とお藤さんの遭難

川崎 巖

1961年8月21日～9月6日のことでした。厳しかった秋の内陸旅行から基地に帰投して、冬眠する間もなく気狂(基地外)の活動に飛び出しました。北の空が明るさを増してきたので、今度クック岬海岸線への水深、地形、気象調査という訳です。メンバーは、村山、清野、大浦、荒金、藤原の諸氏に川崎を加えた40年前は脂の乗り切った元気な猛者揃いです。

足場の確りした大陸旅行と違い、海氷上は薄氷にリード、プレッシャリッジが走り、大陸氷棚下のクレバス、大陸棚上か海氷上か区別のつかぬ円丘冰山群と雪溜り。季節は冬から夏への変わり目。快晴の日はマイナス35度、視界100キロ、ブリザードの日は、マイナス6度、視界5メートル。車で走れる日、車の前をザイルを結んで歩く日、暴風で停滞する日、冰山群の間を右往左往する変化の激しい旅でした。十三

夜の月の下、円丘冰山を見ながら進む雪上車は、砂丘を見ながら砂漠を進む戦車の映画のシーンよりロマンチックな夜でした。

しかし、東からのブリザードが襲来するとただひたすら寝るだけです。小便にテントを出るのが大変なので、16時間我慢して誰か一人が出ると一斉に起きて出るという有様です。小便近く、睡眠浅く、暴飲暴食できなくなった現在からは、全く羨ましい若き日でした。

海氷上で寝ていると海のうねりが背中に伝わってきます。一夜目がさめると大きなリードが開き海面がすぐ近くに現れていることもありました。まるで洗面器に水を張り上の沈みかかった薄紙に乗って揺られている蟻に似ていると思ったものです。

テントはステンレスの支柱にナイロン4200番で片桐特注のピラミット型で、強度には自信がりましたが、海氷に打ちこんだ張り綱のペグが抜けて飛んで来るのには参りました。そんなテントの中で、エアーマットを背にして風を防ぎながら白陽灯のコンドームは明るくプリムスの音は暖かく、コンクウスキーを飲みほして薬用のメチルアルコールを飲む村山隊長の顔は輝いていました。

いつも不安定な雪面の時は、猿回しよろしく、アンザイレンして雪上車の前を歩くのが、二人の役割でした。8月31日は風強く、ザイル繋がず向かい

風に顔をそむけて横に散って進んでいると、お藤さんの姿が消えていました。後ろの運転席から見ていた村山隊長が飛び出してきました。こうようにしてクレバスに近づいて、下を覗き込んで“お藤”と呼んでいました。駆け寄ってみると、青氷の下約6メートルのところにひっかかったお藤さんが、ショックは受けたらしいが比較的元気な声で返事していました。すぐザイルに輪っかを作って降ろし、片端を雪上車にフィックスし引揚作業にかかりました。雪面に顔を出す寸前ストップをかけた村山さんは写真撮影を始めました。

テントに収容されたお藤さんは、その夜一晩“お静”夫人の写真をシラフの中で見入っていたそうです。やんちゃなお藤さんもしかばらくは、しみりしていましたが、後からあんな時に写真撮るなんて、と隊長にボヤいていました。

私は、海拔30mのイーステン・オーデンの初登頂、エクスプロジャーロック94mに三角点よろしくペンキで十字架を記したり、岩石調査と称して宝石探しをしたり、二人ではしゃぎ過ぎた祟りだったと思っています。

お藤さんとは広島大学元藤原健三教授のことであります。(5次冬、9次冬・設営一般)

第22次南極行動の思い出

倉田 篤

第22次南極地域観測支援行動は私にとって初めての南極行であり、その意味で忘れ得ぬ航海であります。「ふじ」が就役して海上自衛隊が南極観測支援を開始して以来、私も一貫して「ふじ」乗り組を熱望していましたが、なかなかその機会を与えられず半ば諦めかけていた時でしたので、ちょっとオーバーですが血湧き肉踊るといった感じで、勇躍出港したことを覚えております。

行動そのものは、暴風圏は低気圧の通過が頻繁でかなりガブられはしたものの、氷状は良好で全般的にはさしたる事故もなく極めて順調に経過したものであると思います。

しかし、新米副長としては全てが初体験で戦力にはなれず、随分と肩身の狭い思いをさせられたことでしたが、この行動中の忘れられない思い出を挙げるならば、初氷山視認の感激とマラジョージナヤ基地沖におけるブリザードとの遭遇です。

初氷山視認

12月16日フリーマントルを出港し一路南下を続け、22日早朝に南緯55度を通過しましたが、初氷山視認は同日9時29分、位置は南緯56度13分、東経110度12分でした。当日は快晴で藍よりも青いといった感じの南氷洋上に、初めて冰山を見た時の感激は今でも忘れられません。

遠距離から見た時は、太陽光に映え

てダイヤのように輝いており、近づくにつれ淡いコバルトブルーとなり、その美しさは、いや増すばかりでした。孤高を保ち、毅然として気高い自然の造形美に感動し、息を飲んで眺めたことは忘れられません。

さらに近づく、海面付近は青みを増し、波にたたかれてえぐられ、解けた水が流れ落ちていましたが、これを見た時、何れこの冰山も解けて消滅する運命にあることに気づき、儚いというか無情というか妙に感傷的な気分を味わうとともに、愛おしいという感じを強く抱いたことが思い出されます。

その後、多くの美しい冰山を見ましたが、最初の冰山視認時の感動を味わうことは無かったように思います。

マラジョージナヤ基地沖での仮泊

2月初旬で昭和基地周辺における支援作業を終了し、超高層日ソ共同観測の引き継ぎのためマラジョージナヤ基地沖に移動しました。

2月12日、モスクワから飛来したIL18Dの到着歓迎会に艦長等が招待を受け、基地に出かけられましたが、夕方から風が強まりヘリコプターの運航が不可能となり、艦長は基地に宿泊されることになりました。その後、風はおさまるところか、夜半になるに従い強さを増し、遂に雪を伴う本格的なブリザードになりました。

新米副長として初めての経験であり、現在停留中の氷盤が何処までもつのか、

氷が割れて流されたらどう処置すればよいのか等々、考えながらまんじりともせず艦橋で不安な一夜を過ごしたことを思い出します。結局、翌日も風はおさまらず午後には内火艇を卸し、たまたま開いたリード沿いに迎え便を出しピックアップしました。後日、艇長から「副長は私を殺す気だったのでは」と冗談を言われ大笑いしましたが、本当に良い経験となりました。

以上、皆様にとっては取るに足りないことと笑われるかもしれませんが、初めての南極行での思い出として、今でも記憶に残っていることを書かせて頂きました。(22次ふじ・副長)

宗谷の楽団

佐々木 昭人

第4次航海中、楽器を持ち込んで、暇な時に一人で楽しんでいる者がおりました。出港後一週間くらいは、船にも慣れず楽器を奏でる余裕もなく、音というものはエンジンの騒音ばかりで、外に出ればアンテナや綱索を切る風の音がするし一日中なんとなく頭の芯が痛い感じ、楽しみは豪華な食事だけですが、これも船酔いで食事を楽しむ所ではなく、ただ体力維持のため無理やり詰め込む始末でした。

シンガポールで上陸リフレッシュ後の航海は、船にも慣れ心に余裕ができ、時々生の音楽が聞こえて来るようになりました。音の発生源は、「マンドリン」

観測隊報道隊員 犬塚 堯、「ギター」宗谷主計士 沼部久三、「フルート」宗谷航空 佐々木昭人の三人でした。赤道祭も近いのでこの三人が集まって何か演奏しようという事になり、楽譜さえあれば何でもやれる程達者？な連中なので夫々の楽譜を持ち寄り練習をする事になりました。船中やかましく静かな所はどこにも無く、結局は飛行甲板でする事になりましたが、今度は風で譜面台が飛ばされる始末でした。楽団名を決めるのに色々な案が出ましたが、当時はやっていた「トリオ・ロス・パンチョス」をもじって、『トリオロス・パンティーズ』に決まり、赤道祭では「赤いサラファン」「ハイドンのセレナーデ」等数曲演奏しました。なかなかの出来であったように自負しております。

これには後日談がありまして、北海道岩見沢市・毛陽小学校の校長 佐々木薫先生および、その生徒と宗谷の松本船長との間で第1次からずっと文通をしており、これが第4次の明田船長に引き継がれておりました。明田船長によると、第4次観測の帰途テープによる声の便りで、内容は明田船長のメッセージの後、この楽団の演奏、宗谷が砕氷しながら突き進んで行く音、ヘリコプターが離陸する音、「取り舵35度！」など慌しく響く船橋での様子でした。続いて立見観測隊長の紹介で『音痴コーラス』と名付けた合唱団による「赤トンボ」「平城山ならやま」「待ちぼうけ」

など録音されており、指揮者は犬塚報道隊員です。この事は後に「奇跡の船・宗谷物語」(あすなる書房)と題して出版され、その中に紹介されています。生徒達が大喜びだったそうです。

第5次では楽団を編成する事は出来ませんでした。コーラス部は『音痴コーラス』指揮者 森田康太郎副隊長と『いかれコーラス』指揮者 石川信義隊員の2グループが出来ました。『音痴コーラス』の方は、比較的真面目な曲目で、2部・3部・4部合奏と正統派。『いかれコーラス』の方は、曲目は自由で皆で斉唱する現代派でした。もちろん、どちらに参加するのも自由で、重複者が多かったように記憶しています。

これにも後日談があり『音痴コーラス』は、昭和基地閉鎖中の昭和38年1月2日フジテレビの正月番組に出演し放映されました。録画が暮れの官庁予算編成の時期でしたのでコーラス部員が集まらず、僅かの人数だったと思います。

「忙中閑あり」長い航海の途中、楽しい思い出でした。(4次~6次宗谷・航空)

第11次の思いで

大和田 雅行

44年11月25日(火) 晴海出港。翌26日、飛行甲板で観測隊員紹介が行われた。同日、早速学生時代からの空手の

練習を始めると観測隊から2人の方が参加。28日(金)の日記を見ると、「観測隊の渡辺さんが熱心である」と書いてある。

12月3日(水) 赤道祭。このころには観測隊員の空手道部員(?)が、5~6人となり、川口副隊長もメンバーだった。

4日(木)「ふじ南極大学」開講。学長は清水隊員。南極の気象(大野隊員) 南極の氷の話(渡辺隊員) 昭和基地案内(川口副隊長) ロケットの話(平沢隊員)等、その道の専門家の話に感心しつつ楽しく聴講した。

24日(水) 別法許可(飲酒)。第10士官室(私の部屋)にて観測隊の川口副隊長、渡辺、清水、伊藤(一)の各隊員と5人で空手道部のコンパ。引き続き、清水隊員の部屋に移動。翌日気がつくと、自室にいたが作業服のままである。担がれて部屋に運ばれたらしい。渡辺隊員曰く、「海軍をやっつけた」。

45年1月1日(木) 賀詞交歓会。昼食後休んでいると、大沼飛行士が部屋に呼びにくる。空手の生徒が練習ができない、と飛行甲板で待っているとのこと。急ぎ道衣に着替え飛行甲板に行く。途中渡辺隊員とすれ違う。飛行甲板に着くと、「空手道部員飛行甲板」とマイクあり。ややあって、渡辺隊員が「今、マイクをかけて来た」と現れ、おかげで大盛況。

1月8日(木) 昭和基地にヘリによ

る空輸開始。空輸は朝から、夕方まで昼食時を除き連日連続。ヘリの整備は夜間となる事もあり疲れもたまる。それでも合間を縫っては乗員と観測隊の方々との個別的懇親会もよく行われた。当時個別的懇親会を「走る」といった。

27日(火) 南極で耐寒訓練。1500、艦発。指揮官衛生長他9名と観測隊から清水隊員。東オングル島南部、貝の浜東300メートルの位置。

翌28日(水)0900、出発。名所「胎内くぐり」を通して帰艦。今でも「南極でキャンプした」と、少々自慢である。

1月29日(木) 第10次隊の内陸調査隊をF-16及びF-0からピックアップ。全員元気。

帰国途上の2月25日(水)1150頃、船体に強い振動を感じる。右プロペラが丸坊主となり、その場で状況待ちとなる。

3月7日(土) 救援のソ連の砕氷艦「オビ号」が遠方に見える。ヘリで、艦長、第10次隊長等が「オビ号」へ。「オビ号」の船長を乗せ、「ふじ」周辺の氷状偵察。現状では「オビ号」も「ふじ」の位置まで侵入不可能とのこと。「オビ号」まで10マイル。

10日(火)「第2次ふじ南極大学」開講。講師は第10次隊員。学長は近藤隊員。大和山脈への旅(安藤隊員) S-160-JA が飛んだ(平沢隊員)等である。

13日(金)2300~0200、立直。14日0100頃、CICから200°方向の氷山が動いているようなので、確認してくれとの連絡。0105頃、突然「ふじ」周囲の氷が割れ、水面が現れる。0107頃、艦長が艦橋に。艦首は40°方向、リードは0°方向。風は右90°から6~7メートルと日記にある。機関科等の準備が整い、0152、出港準備。0300頃、就寝。船体の振動が伝わってくる。明日は外洋か。

14日(土)起床後直ちに甲板に出る。え!? 周囲には棚氷が重なり合い、しかも四方を氷山に囲まれている。「ふじ」は昨日の位置から約6マイル昭和基地方向に流され約2°傾いたまま。ヒーリングも効果なし。船体が氷で持ち上げられているような感じである。

18日(水)午前中から氷盤がゆるみ始め、ついに自力脱出。2343頃、オープンシーに出る。艦内のあちこちで歓声が聞こえる。帰国予定は45年5月9日(土)となった。

艦内の限られた生活空間の中で「ふじ」乗員と、観測隊員がお互いに良く協力し合ったと思う。南極観測を成功させようという両者の心意気と、協力しなければ成功しないというのが当時の状況であったのかも知れない。南極の氷山の氷と澄んだ空気はウイスキーを本当に美味しく飲ませてくれた。今は全てが懐かしい思い出である。(11次・12次ふじ・整備士)

私の南極史

永島 正

「海上自衛隊での思い出は……」と訊ねられたら、私は即座に「南極に行った事と勲章をもらった事です」と答えます。

昭和28年、復員船「興安丸」「高砂丸」の入港出迎えの人々で混雑する港街にある舞鶴教育隊に入隊、当時は保安庁警備隊、制服も階級章も現在とは異なり、上司上官はいずれも旧海軍の関係者、三等警査(最下位の階級)海を知らないイガグリ頭の田舎者、帝国海軍の伝統と精神を叩き込まれたものです。当時、米国貸与のPF(フリゲート艦)とLSSL(上陸支援艇)掃海艇(旧海軍の駆特)のみでした。

当時、古本屋で「白瀬南極探検」に関する古本を入手以来、南極に魅せられ、いつの日にか南極行きの夢を持ち続けました。折りしも、我が国のIGY(国際地球観測年)の参加、「宗谷」の東京出港を新聞で知りました。タロ、ジロの生存には涙したものです。そして基地観測の中止、再開、保安庁から海上自衛隊へのバトンタッチ、新砕氷艦の誕生、熱望すれど選考されませんでした。9・10次に夢が実現、雪上車の輸送、大陸への揚陸、故福島隊員のご遺体収容等に係りました。

帰国後「ふじ」退艦、海幕運用課に勤務中「11次ふじ」のスクリュウ欠損救援活動に係り、海幕オペレーション

室に記録係、裏方として出入し状況・報告・指示の交信を聞き、大都会六本木と1万数千キロ離れた南極海の「ふじ」との切迫した生々しい交信がなされた事など、都民はおろか、海上自衛隊員でも知る由もなく、知っている数少ない一人ではないかと自負しています。

その後練習船「かとり」に転属、南米方面遠洋航海出発前の国内巡航に備え準備中、再び13次ふじ氷海ピセットに関連し、当時海上自衛隊艦艇による初めての救出部隊(「かとり」・「たかつき」・補給艦「はまな」)が編成され、「かとり」に対して突貫工事で防寒対策が実施され、指揮官磯辺将補(11次ふじ艦長)が着任され実習用教材等の陸揚げ、搭載ヘリの予備エンジンからトイレトーパーまで多種多量の物資が搭載され出港命令を待つばかりでした。救援に出港赤道を越えれば南米遠航は代替艦でとの計画、複雑な気持ちで成り行きを待った記憶があります。その後「ふじ」は自力脱出、予定通りに南米遠洋航海の壮途につく事が出来ました。

その後「しらせ」ぎ装員として従事、処女航海(25次)では[ふじ]と比べその偉力と充実した設備等を実感し、拡張・充実した「基地」に目をみはり、9・10次で建設人足として作業したロケット発射基地・建物等に再会、また昨年秋田で32年ぶりでしょうか、帰国

を果たした雪上車に再会、感無量、遠い昔の思い出です。また極地郵趣愛好者としてまもなく届く42次隊記念カバーが楽しみです。

昨年、新宿御苑で行われた首相主催の「桜を見る会」に招待を受けてまもなく1年、これからの南極観測の充実・発展と観測隊員・乗組員のご無事の帰着を祈るOBの一人です。

(追)毎年11月第3土曜日、名古屋港「ふじ」艦上で元「ふじ」乗組員有志による「ペンギン会」が開かれています。(9・10次ふじ、25次しらせ・航海)

思い出の「短編」

三田 安則

時は平成12年10月19日、17:40頃、場所は南極倶楽部例会場「桃山」。

この日、例会終了後、揃って秋田行き予定とあり、皆、年甲斐もなく若干浮かれ気味。室内の空気も若干モワモワとしていた。

その時、初老の紳士が静かに会釈しながら入ってきた……。ン……。ム……。誰だったっけ？船ではない、隊員だ!! 思考は40数年前に遡る…。そして当時幼かりし？隊員達の名前(敬称略)が脳裡を駆け抜ける…。小口…。北村…。小林…。平山…。原…。違う! 違う!! …。

「お久しぶりです、加々美です」
おーっ、2次隊・装備の加々美益次隊員か……。当時の若い顔が、目の前の顔

とオーバーラップして鮮やかに甦った。44年前の若々しい顔が…。観測終了後、船会社（山下汽船）勤務だった彼は、当時7つの海に雄飛していた日本商船隊と共にロンドン・ニューヨーク支店長等を歴任し、今日に到ったこと等、想い出話に花が咲いたが、突然「三田さん、軟い映画があったでしょう!!?」なんて云ったですかねー」「あった、あった!!」と云ったものの、年はとりたくない、咽喉まで出かかった言葉が??? 出てこない。アーだ、コーだと云っている内に、ヒョコッと出て来た「短編!!」…「短編!」「短編!」皆が声を揃えた。懐かしい昔の恋人の名前を想い出したように。

「短編」この名は1次・2次隊にとっては忘れ難い懐かしいものである。また、3次隊以降も新隊員・新乗組員には目を見張るものであったと思う。

船の揺れもあったが、初めて見る刺戟シーンに感極まって、椅子から転げ落ち全治5日間の怪我をする隊員が出るぐらい特効あるものであった。

「短編」とは軟い映画（世に謂うブルーフィルムと称されるもの）であった。長い航海を経験している自分には「こんなものまで必要なのか?」と思った位だが、お上の御慈悲というか、隊幹部の精神医学的配慮か10本を越すフィルムが積み込まれていた。「テアトル宗谷」からのお知らせ、「本日の映画、雨月物語及び短編」という風に船

内放送されると、少々時化ていても観客動員数はグッと上がる程人気があった。

7次以降、ビデオその他種々のものが氾濫している現在の娯楽、特に映画の事は判らないが、1次には日活・東宝・松竹・大映・東映・新東宝の6社から25本の劇映画、その他NHK、小西六、個人から教育映画その他が積み込まれていた。

嘘か誠か判らないが、口さがない連中の話では短編は、関係官庁が没収したものを特に貸し出してもらったものとか、娯楽担当隊員が自ら出演までして製作したものであるという様な、過激な噂まで流れていた。

ビセット時などは別として、航海中は週1~2回上映されたが、その度に併映される程数はなかったが、反復鑑賞し、最後には逆回しで見た覚えもある。我々は「緩慢なる性欲の発散」と称し、有難く? 拝見したものである。

寄港地への入港が近くなると刺戟を避けて上映は禁止され、代わって南極新聞等に衛生講話や上陸時の注意等がのようになる。

生活環境が格段に良くなった現在では必要ないかも知れないが、劣悪な状況の中での、むさ苦しい男ばかりの世界なればこそその「短編」であった。

44年振りに再会した加々美隊員との想い出話から飛び出した「短編」。貧弱な装備ながら南極観測の道を開い

た初期の隊員・乗組員への精神安定剤であり、活躍の源泉となったのかも知れない「短編」に改めて感謝。

オーロラ川柳（印度洋編）

二代目は 初代に比べ 少し落ち
二代目は 少し落ちると 皆が云い
法律で 裁けぬウラミ 船のめし
ハッターは メス程切れず 口惜しがり
シークレット・コードを包む 薬包紙
酒ばかり 飲みに来たかと ネプチューン
暑気払い 過ぎて 医務室 繁昌し
酒・映画 一つ足りぬと 愚痴を云い
(1~5次宗谷・航海)

NHK “プロジェクトX” 出演まで

高尾 一三

話は昨年11月2日の南極OB会の会場に戻る。三田さんからNHK札幌放送局のディレクター西入さんを紹介された。話は毎週火曜日に全国放送されている“プロジェクトX”に宗谷を載せたいという内容であった。

17日には取材と当時の資料があったら見せてほしいということで家に来られた。前もって揃えておいた資料などを見ながら西入さんの取材に答えた。

何分にも当時の船長、航海長は亡くなられており、私が船長に代わって取材を受けることそのものに重荷を感じていた。また改造については、当時の監督官徳永さんに聞いて欲しいと頼んだ。事が事だけにその重荷はこれからの取材中私の胸のなかにあった。

取材の主な点は、宗谷の改造と氷海の航海であった。宗谷の改造についてはぎ装員として徳永監督官の下で約8ヶ月間改造工事につとめたので、その当時の改造記録と改造写真は手元にあった。改造工事では、宗谷の船体は鉸接構造であったところへ補強のために二重張りにしたり、両舷にバラストタンクを増設するため銅板を溶接した。その溶接のため鉸の弛みやき裂ができるのではないかと心配され、特に水圧テスト、エアテストを厳重に行い、いわゆる「水漏れ」を防いだ。この「水漏れ」は台本でも取り上げられ、唯一の改造の注目点となった。

氷海の航海についてはリュツォ・ホルム湾の氷状、群氷中の操船、砕氷能力等広範囲にわたった。

次に12月23日に2回目の取材が家で行われ、今回はカメラマン同行であった。取材の内容も前回と同じで、この取材をとおして少しずつ“プロジェクトX”の趣旨も分かってきた。氷海の航海については松本船長の「的確な判断」が第1次の接岸の成功となったことを強調した。ただ今となっては船長の判断を推測するしかない。しかし今取材に対して答えをださなければならない。何分にも約45年前の状況であり、正確にしかもなるべく平易に答えることができるだろうか。大いに悩む点であった。幸い1次、2次、3次と自分なりに航海と気象の記録をしてい

たので、その内容はどうかこれに
そって答えていけば自分の発言には責
任が持てるのだと考え気持ちが落ち着
いた。

第3回の取材は年が明けた1月9日、
「東京商船大」で行なわれ、おおむね
前回と同じ内容であった。

ついで第4回の取材は10日、品川の
「船の科学館」の宗谷で行われた。船
橋の人員の配置の状況、航海計器の説
明と船の動揺による注意点等が取材の
対象であった。それぞれの取材は約3
時間ずつで、同時にカメラが回ってい
た。

2月1日NHKから連絡があり渋谷の
放送センターに来てほしいとのこと、
1次隊員の平山善吉さんも一緒であっ
た。その前に私には当日放映の台本が
FAXで送られてきた。読んでみると放
映時間45分の内、前もって編集された
VTRの合計が35分45秒で残りは約9
分である。この時間に2人で約10の質
問をこなせるのか心配であった。

台本を見ると改造の質問が一つ、砕
氷の質問が一つ、宗谷の生い立ち、そ
して出航時の様子であった。はたして
うまく答えることができるであろうか。

いよいよ本番前、西入さんと最後の
打ち合わせ。NHKさんは固有名詞はご
法度と聞いているが、たとえば「浅野
ドッグ」と固有名詞を使っても良いの
か、と聞いたところ今回は固有名詞を
使ってもよいとのこと。各会社の仕事

に対する熱意等を話してほしいとのこ
と。やや安心した。

102のスタジオに入ると、テレビで
見なれた顔の国井さんと久保さんの顔
が見え、二人はリハーサル中。そのリ
ハーサルが終わるまで、13日放映され
る宗谷のVTRを平山さんと一緒に見て
いた。宗谷の赤道祭、暴風圏、それ
に群氷中の宗谷が写っていた。そのリ
ハーサルが終わりいよいよ本番である。
最初は私一人、久保さんの質問は「水
漏れ」である。台本どおり無事通過。
ここで落ち着いた。やはり一番の難関
は「砕氷」の仕組みの説明であった。

「どうやって氷を割るの」久保さんの
声、ここで国井さんが宗谷の模型を持
ち上げ私の説明に合わせて模型を動か
す。「砕氷船の特徴として船首には切り
込みがあり、氷が割れない時には後に
さがり、助走をつけて氷にのしあがる。
その時のエネルギーと船の重さで氷を
割る」と説明、カット、カットで3回
やりなおす。3回とも説明のニュアンス
が違っていたようである。どれが放
映されるか気になっていた。後の質問
は大体台本の通りであった。

ここで平山さんと交代。平山さんの
説明は興味深かった。台本最後の項目
は当日の出航の話になり、二人が出航
時の気持ちをそれぞれ述べた。次に台
本になかった項目が飛び出した。平山
さんは建築担当の立場から、私は航海
担当の立場からそれぞれ答えた。私は

砕氷船の構造上、宗谷は動揺が激しかったこと、リュツォ・ホルム湾の氷は宗谷の能力以上で簡単には進むことが出来なかったこと、また海図もなかったこと等を話した。

すべての前座は終わった。あとは本番の13日を待つばかりである。なんとなく落ち着かない日が続く。(2月10日記)

2月13日の放映後、家の電話は夜半まで鳴った。南極観測の立ち上がりがよく分かった、宗谷の生まれから改造までまとまっていた、という電話の内容であった。南極観測の関心の高さがよく分かった。

地球観測年の観測に参加するためには、まず基地の選定が必要である。観測できる家屋の建設が必要である。宗谷がオングル島の近くまで(約20km)接近できたからこそ、これらが出来た。第1次はヘリコプターとセスナ機、これでは家屋のパネル1枚も搬べない。ましてセスナ機は開氷面がなければ飛べないのである。

忘れもしないあの第1次の1月16日、ヘリコプターで前方30kmに開氷面を発見、ここでもセスナ機を発進、約3時間にわたりリュツォ・ホルム湾を偵察、この偵察で前方に大陸まで続く水路を発見、宗谷は群氷に突入した。約1週間かけて密群氷を割りオングル島に接近したのである。ここから昭和基地のドラマが始まった。この船長の「的

確な判断」と宗谷の苦闘があつてこそ、昭和基地が生まれたのである。

2月20日の第2回の放映中に数秒の松本船長の姿があつた。出来ればナレーションでよい、この1月16日の船長の決断を話して欲しかった。このことは取材中とくに強調していた。(2月21日記) (1次~3次宗谷・航海)

南極倶楽部の発会と経過

初代つなぎ幹事 渡辺興亞

今年2月15日に南極倶楽部は2周年を迎え、記念例会には65人の参会者があり、この日までの倶楽部会員は188名となった。本会の今後の発展を願って、倶楽部発会の経緯とその後の経過を述べる。

本会の発足には村山雅美隊長を囲む9次隊の会が大きく関わっている。9次隊はそれまでも定期的な会合をもたれ、旧交を温めておられた。その会に私は招かれたことがある。それが数回に及んだ頃、村山さんからこの会をもっと大きなものに出来ないかという話があつた。当時、神田のはずれに11次、29次に参加した坂本好吉さんが始めた「おんぐるや」があり、坂本さんの夭折の後に、越冬隊に三度参加した調理師渡辺久好さんが引き継がれ、南極観測隊のOB達のたまり場ともなっていた。9次隊の会合の場所も「おんぐるや」に移り、その会合で発会の相談が進められたのである。最初から発会

発起人という組織があったわけではなく、何時となく私に発会の文案作りの役割が回ってきて、村山さんやその場に居合わせた人たちと相談しながら倶楽部の構想が練られ、それを反映した発会案内が作られていったのである。

どういう倶楽部にするかについては村山さんの抱かれていたイメージが基礎となっている。会員は南極観測隊に直接関わった人々だけではなく、個人的に南極に行かれた人、極地に関心を持つ人、北極関係者も当然含めるといふ巾の広さで、大方の賛同を得たのである。また、倶楽部設立の主旨は会員が集まって一献を傾け、旧交を温めつつ、極地に在りし日の旧きを辿り、時には新しきを語ることに尽きる。

倶楽部の運営が特定の人に偏ったり、負担とならないようにすることが、長続きの最良の方策であるので、会務は出来るだけ単純な形で行うことにした。会員になるには例会で参会者名簿、会員名簿に記入し、自分の会員番号を知るだけである。会費の徴収は会務が煩雑になりそうなので当面は考えないことにした。しかし、時には例会やイベントの案内を送る必要もあり、何がしかの経費が必要なので、例会のあがり（寺銭）の5%をそれに当てることにした。

こうした準備がただらとといった状況で進み、発会案内を発送するに至ったのである。

南極倶楽部の発会の御案内の文案「南極観測隊も今年で40回、そのOBは千数百人を越すようになりました。南極観測船も「宗谷」、「ふじ」、「しらせ」と替わり、その乗組員の方々の数も数千人に及ぶのではないのでしょうか。外国隊に参加したり、私的な探検や旅行で南極大陸を訪れた方たちも含めると相当な数になるでしょう。

そうした、いわば南極に縁のある人々で、時には集い、一献傾けつつ、かつての旅を語り、友来れば旧交を温め、あるいは将来の旅の構想を練るといふのもいかがでしょうか。

かつて南極越冬隊に参加したコックさんの坂本好吉さんが開き、渡辺久好さんが引き継いだ「おんぐるや」の改装開店を機会に、この南極に縁の深い店で「南極倶楽部」と名付けて定期的に会合を開いてはどうかという提案があり、有志で語らって発会を企てた次第です。昭和基地のバーに懸かっていた「だらしく営業中」の看板が懐かしいこの頃ではないでしょうか。オングル風を踏襲して楽しみたいと考えています。多くの皆様の参加を願いたく、お誘いする次第です。」

案内文中の下線を付した文章は倶楽部の設立趣旨を示している。文末の下線の行は特に、南極観測隊OBへのメッセージである。本会発会の発起人代表は村山さんであるが、倶楽部の発展を願って村山さんはじめ長老方の配慮で

然るべき方々に発起人をお願いした。「ふじ」の松浦艦長、「宗谷」の三田さん、「北極」の吉田さん、観測隊OBの大御所の何人かには電話で直接お願いし、御了解を得たが、葉書での案内ではスペースが足りず、発起人一同という形にした。

平成12年2月17日に「おんぐるや」で発会例会を開くに至り、48名の参会者を数えた。当日の唯一の議事は、今後の会務処理のために会長を決めることであった。この提案に対し、満場一致で村山雅美さんが推戴された。当日は幹事も何も決まっていなかったので行き掛り上、渡辺が幹事役をつとめたが、結局その後2年間この役割を引き受けることになってしまった。最初の数回は現役組が幹事を務めたが、例会の形も定まってきたので3回目からはそれぞれの出自グループが2回ずつ例会幹事を務めるルールが定着した。「現役」、「しらせ」、「宗谷」、「設営」、「報道」、「超高層」、「医者」、「気象」などのグループに引き受けていただいた。最近では隊長と艦長の組み合わせの「観測隊」観測ロケット打ち上げ組で「ロケット」といったグループも自発的に幹事を引き受けてくださった。出自グループで幹事というルールは、グループの持つ以心伝心の伝達機能を活用して会員の輪を広げようという魂胆でもある。

当初、会務組織なしで倶楽部が始ま

ったが、例会幹事のルールが出来ると、そのつなぎのための幹事が必要となり、毎回の「寺銭」の管理も必要となって、会計幹事役を佐野さんが引き受けた。ついで「寺銭」とともに毎回新しい参会者名簿が届けられるために、名簿管理も会計幹事の仕事に付け加わった。たしか発会の時であったと思うが、村山さんから会報発行の話が出て、誰に頼もうかということになった。29次越冬中に神田さんがラングホブデの生物観測小屋で4人で数カ月滞在したときにも新聞を発行していた。その手腕の並々ならぬものを思い出し、彼を推薦したところ、結果は会員一同が良く御存知の通りである。今では余人をもって換えがたい状況にある。

そんなわけで、倶楽部運営に関わる幹事役は自然発生的に増え、それなりに順調に倶楽部運営に当たっている。この他にも会員数の増加とともに規模の大きい出自グループへの連絡役も必要となり、「しらせ、ふじ」関係は久松さん、「宗谷」関係は三田さんがその幹事役を引き受けられている。世の中にははまり役どころというものがあるが、それなりに大役なので2~3年を目処にボランティアワーク的に交代していく形が良いのではないかと考えている。いずれにしても出来るだけ規則を作らずにスマートな運営を計りたいものである。

倶楽部は例会で歓談するだけでは

なく、これまでにいくつかのイベント行事が行われた。1年目の6月には第1回ミッドウインター祭りが川口湖の極地研究所研修所で開かれた。これはロア・ボードアン基地で越冬したベルギー隊が毎年、ブリュッセルでミッドウインターパーティをしていると聞いたことに由来する。山岸さん、三上さんが幹事を引き受けてくださった。晩餐を楽しみ、翌朝村山さんの南極観測の昔談義を聞く(1、2回目)という催しで、昨年6月には第2回目を開催した。両幹事がしばらく面倒を見てもよいということなので、おそらく恒例イベントになるはずである。第1回は13次の五味さんが、第2回は「ふじ」の田丸さん、飯塚さんが晩餐調理を引き受けてくださった。

「白瀬南極探検隊記念館にKD605を訪ねる会」は盛大であったが、「会報」5号に、西部さんが詳しい報告をされている。「しらせ」元艦長の久松さんには「しらせ」の体験航海(第1回、平成12年10月)の面倒を見ていただいている。これは大変好評でイベントとしては恒例化しそうである。

例会の案内は原則として出さないことにしているが、夏枯れの8月(1年目)、1周年記念例会、会場の変更(2年目4月)、忘年会(12月)および2周年記念例会には全会員に葉書案内を送った。この案内は通常はなかなか出席出来ない地方在住会員に対する

サービスでもある。

多数の参加者があった例会は48名(発会)、38名(新年会、12回)、48名(1周年)、45名(忘年会、23回)、38名(新年会、24回)および65名(2周年)で、通常の月の平均は通常は25名(初年度)、30名(2年目)程度で、次第に増加の傾向である。例会日は第3水曜日(おんぐるや)から第3木曜日(桃山)に会場の都合で変更し、2年目の8月は桃山のお盆休みのため休会となった。今後8月の例会をどのようにするかは決まっていない。

最近は女性の参加者も増え、例会の雰囲気もやや華やかになり、また最初の頃は出自グループ毎に集まる傾向が強かったが最近では散らばる傾向も見られ、倶楽部らしくなってきたといえよう。慣れてくると時に酒宴の雰囲気が強まる可能性もあるが、それほどにして南極倶楽部らしい伝統を培っていただきたい。

いまのところ主として常連の参加者に限られるが、女性会員の協力で顔写真付き会員名簿を作成中である。よく知っている会員だが名前が出てこないという経験を多くの方がされていることと思う。そうした御要望に応える次第である。

ともあれ、独善的に進めてきた倶楽部運営の報告をするとともに、今後一層南極倶楽部が発展し、スマートな運営が計られることを願い、本文をした

ためた次第である。

- 訃報 -

本会会員の隅垣昭男氏(舞鶴市)は、本年3月30日お亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

隅垣氏は11、12次にふじの掌帆長として活躍され、また、ピセット会の運営に尽力されました。

- 会務連絡 -

去る2月15日(木)の南極倶楽部創立2周年記念の例会は、多数の会員及び新規加入者の参会により、会場が溢れんばかりの盛況でご同慶の至りです。予想をはるかに越えて、68名もの方々のご参集となりました。その為に、一部の方々には会費分の飲食を堪能していただくことや、ご歓談を楽しまれる場所の提供が不首尾であったようにも見受けられました。誠に申し訳ありませんでした。倶楽部会誌「南極」の編集幹事・神田啓史氏が、発足当初からの例会参加者数の変遷や個人別参会状況などをまとめつつあります。ご興味のある方は、神田編集幹事までご連絡下さい(: 03-3962-4761)。

4月・5月の例会幹事は、「設営現役」組が担当されます。6月・7月は「隕石」組と交渉する手はずにしています。幹事幹旋担当 鮎川 勝(会員番号:53)
連絡先 : 03-3962-2762

E-mail: ayukawa@nipr.ac.jp

- 編集後記 -

プロジェクトXの反響が南極倶楽部にも及び、大勢の名男優を輩出した本倶楽部とその会報の責任はますます重大となってきました。

紙面の都合で本号に掲載できなかった原稿は次号(7月)に載る予定です。
編集連絡先: 神田啓史 03-3962-4761
FAX 03-3962-5743

E-mail: hkanda@nipr.ac.jp

- 新入会員 -

会員番号 / 氏名 / 〒 住所 / / e-mail

191 平山 昭英

192 金光 将介

193 中井 康二

194 鳥居 鉄也

195 島野 邦雄

196 平澤 威男

197 伊東 弘二

198 中山 卓

199 山上 安広

200 伊藤 幸雄

201 吉田 仁士

202 芦田 精一

203 熊谷 昭四郎

204 濱田 真人

206 蔵本 恒造